בְּרֵאשִׁית

創世記 2 章

8 節

ベレーシート

בְּרֵאשִׁית　創世記

神である【主】は東の方のエデンに園を設け、

そこにご自分が形造った人を置かれた。

（創世記２章８節）

東の方・・・

どこを起点にした見た東なのでしょうか。

さらに、奥義が開かれます。

「創世記２章」を学ぶ上で大切な視点

イザヤ書 34 章 16 節

【主】の書物を調べて読め。

（詳らかに読め（つまび）！ということです。聖書を細かく詳しく読むとは、

尋ね求めて発見せよということです。慕い求めて見出せということ

です。読めとはקָרָא（カーラー）呼ぶ、と同義です。見つけ出せ！ということ

です。主の書物を尋ね求めて何かを見つけよということです。

何を見つけるかというと・・）

これらもののうち、どれも失われていない。

それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。

それは、主の口がこれを命じ、主の御霊がこれらを集めたからである。

これは創世記を学ぶ上で非常に重要です。

創世記だけを読んだとしても、創世記を理解できるわけではありま

せん。本当の意味で理解するには、創世記を支える伴侶となるべきこ

とばと出会うときです。その伴侶となる箇所を連動して読むと、

ようやく、理解できるようになります。

聖書は預言的であり、重層的です。

同じ事が繰り返されて、重ねられているのです。　そして、

その伴侶に導くのが聖霊です。

アブラハムはエリエゼルにイサクの嫁探しを頼みます。（創 24）

そのとき、エリエゼルに「あなたの前に御使いを与える」と言いました。　そして、ハランで見出されるのがリベカです。

主の使いにエリエゼルが導かれて、リベカと出会うわけですね。

このように、聖霊が伴侶となるべくみことばを、私たちに教えてくださることで、聖書が立体的になるというしかけです。　これは、

創世記の学びに重要なプロセスとなります。

御霊は、聖書全体から伴侶となるべき　みことばを集めてくださいます。　コンコルダンスなどで調べるものの、それだけでは見出だせないことがあります。　神様の御計画の全体像が見えていないと、

霊で見分けることは難しいでしょう。

尋ね求めて読め、そうすれば見出すことが出来る、ということです。

前回の補填

前回は、人が神を入れる器（容器）として造られたことを学びました。

創世記２章７節

神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

補填すべき点は、イスラエルを基軸とする視点です。

単に人間がどのように造られたのかという一般論ではありません。

神様の歴史は、イスラエルを基軸として展開されています。

イスラエルを通して、神のご計画を語られます。ですから

イスラエルの存在を忘れて、人間がどのように出来たかという話ではないのです。創世記１章２章３章は、イスラエルを基軸にすることで、まったく見方が変わってきてしまいます。

この視点で、２章７節を見てきました。

神はモーセに、ご自分の名を初めて「　主יהוה　」という固有名詞で啓示しました。（出６：２）　「　主יהוה　」を「アドナイ」と読んでいますが、この名は贖いの概念を含んでいます。（出６：６）

そして、「地אֶרֶץ（エレツ）」の中に「大地הָאֲדָמָה（ハーアダーマー）」があるわけです。

イスラエルを基軸とするならば、

「地אֶרֶץ（エレツ）」における「大地הָאֲדָמָה（ハーアダーマー）」は、

エジプトをたとえています。そして「　ちり　」は、

エジプトの中にいた「　イスラエルの民　」を指すと考えられます。

主なる神は、

イスラエルを「　ちり　」から粘土に形造り、火という試練を通して

神の栄光を啓示する「　あわれみの器　」とされたわけです。

エレミヤ書 18 章 19 章では、神を陶器師にたとえています。

そこでは、陶器師が陶器を砕いて粉々にすると記されています。

預言者エレミヤに、神のご計画を情景でたとえている箇所です。

エレミヤ書 18 章 2-6 節

2　「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたにわたしのことばを聞かせる。」

3　私が陶器師の家に下って行くと、見よ、彼はろくろで仕事をしているところだった。

4　陶器師が粘土で製作中の器は、彼の手で壊されたが、それは再び、

陶器師自身の気に入るほかの器に作り替えられた。

5　それから、私に次のような【主】のことばがあった。

6　「イスラエルの家よ、わたしがこの陶器師のように、あなたがた

にすることはできないだろうか―【主】のことば―。見よ。

粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、

あなたがたはわたしの手の中にある。

エレミヤ書 19 章 11 節

彼らに言え。「万軍の【主】はこう言われる。

陶器師の器が砕かれると、二度と直すことはできない。

陶器は砕かれるともとには戻りません。もう一度作り直さなければ

なりません。　焼かれた陶器がひとたび砕かれるなら、もとのかたち

には戻れません。　ところが神である主は、元に戻される

「　あわれみの神　」だということです。　不可能が可能なのです。

イスラエルの民の歴史は、何度でも壊され、

何度でもよみがえらされる、そのような運命を担っています。

新約聖書からパウロは次のことばを語っています。

ローマ人への手紙 9 章 21、23-24 節

21　陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないでしょうか。

23　しかもそれが、栄光のためにあらかじめ備えられた

あわれみの器に対して、ご自分の豊かな栄光を知らせるためであったとすれば、どうですか。

24　このあわれみの器として、神は私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。

ここで聖書は、イスラエルの民が基軸の中で、私たち異邦人も接ぎ木して「　神のあわれみの器　」として召されたと述べています。

器は本来何かをするためではなく、何かを入れるための容器です。

私たちは、神の豊かな栄光を知らせる「　あれみの器　」になることを願っておられるのです。

ハハニーナー　ケレー

כְּלֵי־הַחֲנִינָה

「　あわれみの器（複）　」

「神のあわれみ」

神の民は、神の宝であるキリストの霊を入れる容器と言えます。

それは同時にあわれみの器（ローマ９：23）だとパウロは語ります。

どういうことでしょうか。

神の「חָנַן（ハーナン）あわれむ」が、イエシュアによって発動されるとき、

必ず（同情+行動）がなされます。

σπλαγχνίζομαι（スプランクニゾマイ）

「　かわいそうに思って　あわれんで　」

（共観福音書 12 回）

マタイの福音書 18 章 27 節

家来の主君は**かわいそうに思って**彼を赦し、負債を免除してやった。

ルカの福音書 7 章 13 節

主はその母親を見て**深くあわれみ**、「泣かなくてもよい」と言われた。

ルカの福音書 10 章 33 節

ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来る

と、見てかわいそうに思った。

ルカの福音書 15 章 20 節

・・父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。

イェシュアが何かをする前は「　かわいそうに思って　」とか

「　あわれんで　」と記された後で行動されます。

ある人は目が開き、ある人は生き返り、ある人々は食べ物を与えられと、様々なかたちで表されています。

何か罪を犯した時、どうしようもなくなって行き詰まり、

「　神よ　私をあわれんでください。　」と祈るなら、

神は黙っておられません。行動をされるのです。

「　あわれんでください。　」　これは、

私には、何もありません。　すべてはあなたによって決まると

伝えるようなものです。「　あわれんでください　」と

その人の口から出る時、破格の待遇がなされます。

ダビデがそうでした。

詩篇 51 篇 1 節

神よ　私をあわれんでください。

マタイの福音書 20 章 34 節

イエスは深くあわれんで、彼らの目に触れられた。

ルカの福音書 18 章 13 節

・・「神様、罪人の私をあわれんでください。」

このように、神のあわれみの意味を知るようになります。

それが「　器　」です。

創世記 1 章で、神がご自身のかたちに人を創造されました。

ご自分のかたちに似せて人を創造されましたね。

最初の人は失敗しました。

そしてもう一度、最後の人が「　器　」を実現します。

2 章では、神である主は人をבָּרָא（バーラー）**創造したのではなくて**

יָצַר（ヤーツァル）**形造ったのです。**

それは　以下にまとめることができます。

●人を神の栄光を啓示する「　あわれみの器　」として יָצַר（ヤーツァル）

　形造られたということ。

そして、根底にイスラエルがありますから、

●神はその「　器　」にいのちの息を吹きかけて、人を生きたもの

　とされたということ。

イスラエルを見れば、理解できます。　イスラエルはこの

「　いのちの息　」を吹きかけられてはいないのです。

やがて、吹きかけられて「地と天」はつながるのです。

イェシュアがこの地上に降りて来て（地上再臨）、

イェシュア（メシア）とイスラエルはつながります。

それがメシア王国です。　「　神の器　」としての容器を

「　あわれみの器　」として形造ったという視点は、3 章を解釈する

上でも、聖書全体を解釈する上でも極めて大きな影響を与えます。

ここまでが前回の補填としてお話しました。

さて、　今日のテキストに入っていきたいと思います。

２章８節

神である主は東の方のエデンに園を設け、

そこにご自分が形造った人を置かれた。

ここで初めて登場する４つの語彙です。

「　東の方の　」「　エデンの園　」「　設ける　」「　置かれた　」

語彙の内容を深く知るためにヘブル語で調べていきます。

ヘブル語で、既成概念を覆すような発見があると、

どういうことなのだろうと面白くなってきますね。

「東の方の」

多くの聖書が「東の方、東の方の」と訳しています。　さて、

「　東קֶדֶם（ケデム）**　」は　どこを起点とした東の方なのでしょう。**

明確ではありません。

「　東の方にエデンの園を設け　」とありますが、

どこを起点した東の方なのか・・・。

エジプトの「ちり」がイスラエルだとしたら、

東の方はバビロンの方角になりますが・・・。

この語彙「 קֶדֶם（ケデム） 」を「東」として使う箇所は多くありますが、

ここでは、時の起点を表す前置詞מִן（ミン）の省略形מ（メーム）を接頭語とした用法で、「昔」「以前」「前」を表しています。

וַיִּטַּע יְהוָה אֱלֹהִים גַּן־בְּעֵדֶן מִקֶּדֶם

וַיָּשֶׂם שָׁם אֶת־הָאָדָם אֲשֶׁר יָצָר

מִקֶּדֶם（ミッケデム）は、「以前からある」つまり、人が創造される以前からあったと解釈できます。　人が創造される以前からあった本体で、本体の写しと影が「　エデンの園　」と理解することもできます。

מִקֶּדֶם（ミッケデム）「以前からある」

●イザヤ書 45 章 21 節

告げよ。証拠を出せ。ともに相談せよ。

だれが、これを昔から מִקֶּדֶם（ミッケデム）聞かせ、以前からこれを告げたのか。

わたし、【主】ではなかったか。わたしのほかに神はいない。

正しい神、救い主、わたしをおいて、ほかにはいない。

●イザヤ書 46 章 10 節

わたしは後のこと（黙示録のこと）を初めから告げ、まだなされて

いないことを昔から מִקֶּדֶם（ミッケデム）告げ、『わたしの計画は成就し、わた

しの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

創世記の最初から黙示録を語っているよということです。

創世記は、実は最後のこと（黙示録）を語っているということです。

これが真実です。　この繋がりは、時間に支配されない神ですから、

終わりと最初が、すでに了解済みで、歴史の中に神の思いやご計画が

撃ち込まれているわけです。

まだなされていないことを昔から語っている　わたしの計画は成就

し　わたしの望むことをすべてその歴史において成し遂げると

語られています。

●ネヘミヤ記 12 章 46 節

昔から מִקֶּדֶם（ミッケデム）、ダビデとアサフの時代から、歌い手たちのかしらたちがいて、神への賛美と感謝の歌がささげられた。

●詩篇 74 篇 12 節

神は昔から מִקֶּדֶם（ミッケデム）私の王　この地において　救いのみわざを行う方。

●詩篇 77 篇 11 節

私は　【主】のみわざを思い起こします。昔から מִקֶּדֶם（ミッケデム）のあなたの奇しいみわざを思い起こします。

（77 篇は瞑想の章で、瞑想用語が沢山出てきます。）

●詩篇 78 篇 2 節

私は口を開いて　たとえ話を　昔からの מִקֶּדֶם（ミッケデム）謎を語ろう。

●ミカ書 5 章 2 節　（イエシュアの誕生）

「ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出

る。その出現は昔から מִקֶּדֶם（ミッケデム）、永遠の昔から עוֹלָם（オーラーム） מִימֵי（ミーメー） מִיּוֹם 複数連語形

から定まっている。」

隠された昔から、神様のご計画が定まっているということです。

反対に、「　東の方　」「　東に　」と訳す箇所も沢山あります。

●創世記 3 章 24 節

こうして神は人を追放し、いのちの木を守るために、ケルビムと、

輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東 מִקֶּדֶם（ミッケデム）に置かれた。

●創世記 11 章 2 節

人々が東 מִקֶּדֶם（ミッケデム）の方へ移動したとき、彼らはシンアル（ペルシャ）

の地に平地を見つけて、そこに住んだ。

●創世記 12 章 8 節

彼（アブラム）は、そこからベテルの東 מִקֶּדֶם（ミッケデム）にある山の方に移

動して、天幕を張った。西にはベテル、東 מִקֶּדֶם（ミッケデム）にはアイがあっ

た。彼は、そこに【主】のための祭壇を築き、【主】の御名を呼び求

めた。

●創世記 13 章 11 節

ロトは、自分のためにヨルダンの低地全体を選んだ。

そしてロトは東מִקֶּדֶם（ミッケデム）へ移動した。こうして彼らは互いに別れた。

ロトは東の方、ソドムとゴモラに移ったわけです。

このように見ると、創世記の 8 節は「東の方の」と訳すのがいいのか、あるいは「昔からある」エデンに園を設けというのが相応しいのか判断が分かれるところです。

皆さんはどう思いますか。

東の方のエデンですか。エジプトから見ると、エルサレムは、東の方向になり、バビロンも東の方になります。それとも人が造られる以前から存在するエデンに園を設け、人を置かれたと理解しますか。

מִקֶּדֶם（ミッケデム）の意味を考えさせられます。

私個人の意見では「昔からある」と訳しても良いかと考えています。

人間の置かれる前から、エデンの園はあって、ご自分が造った人を置かれるご計画があったということです。

東という方向よりも、「以前からあった・昔からあった」、

人間が造られる前に存在したと理解しても全然問題ありません。

ベエーデン　ガン

גַּן־בְּעֵדֶן

エデンの園

「エデンにある園、エデンの中の園」と言う意味です。

エーデン

עֵדֶן　贅沢なところ　良いものが沢山あって、思いのまま食べてもよい所、しかも豊かな水もある源泉から四つの流れを造っています。　神は、人が食べるために、沢山の木を生えさせました。　ここもたましいの理解で読むと考えられません。

人間が木を食べるって？　エデンには木しか生えていません。

その中の中央に、「　いのちの木　」と「　善悪の知識の木　」がありますが、その他もっと多くの木があります。　園の木を全部食べなさいと言われました。　エデンには、毒の木はありません。

ガン
גַּן 四方で囲まれた庭

聖書での「　四　」は、すべてを象徴する数、全世界を表しています。

七十人訳聖書では園を「パラダイス」と訳しています。

旧約で「　エデンの園　」という表現は２章８節の他に、

創世記２章 15 節、３章 23，24 節、エゼキエル書 36 章 35 節、

ヨエル書２章３節、6 回のみ登場です。

特にエゼキエル書 36 章 35 節は、メシア王国において荒れ果てた

イスラエルの全家が耕されて、エデンの園のように回復されること

が預言されています。

エゼキエル書 36 章 35 節

このとき、人々はこう言うだろう。「あの荒れ果てていた地（エルサレム）はエデンの園のようになった。廃墟となり、荒れ果てて、破壊されていた町々も城壁が築かれ、人が住むようになった」と。

「　エデンの園　」は、神と人が一つ אֶחָד（エハード）になる喜び、楽しみを表現しています。　歴史の中で展開される「　幕屋　」は、

神と人がともに住む場である「　エデンの園　」です。

それが歴史の中では「　幕屋　」になり、そして「　神殿　」となります。　「　神殿を壊してみなさい。わたしが三日で建てる　」と言われたイェシュアご自身も神殿です。

私たちも神殿ですね。　それが本体である「　新しいエルサレム　」とも言い換えることが出来ます。

詩篇 36 篇 8 節

彼らは　あなたの家の豊かさに満たされ　あなたは　楽しみעֵדֶן（エーデン）の流れで潤してくださいます。

エデンを享受する人の子らを見ることができます。

贅沢極まりない楽しみをעֵדֶן（エーデン）で現わしています。

יִרְוְיֻן	מִדֶּשֶׁן	בֵּיתֶךָ	וְנַחַל	עֲדָנֶיךָ
イルヴェユン	ミッデシェン	ベーテハー	ヴェナハル	アダーネーハー
彼らは脂肪で満ちあふれている	脂肪に	あなたの家の	流れを	あなたの楽しみの

תַּשְׁקֵם
タシュケーム
彼らに飲ませる

●彼らはあなたの家の豊かさに満たされ　あなたは楽しみの流れで潤してくださいます。（新改訳 2017）

●あなたの家に滴る恵みに潤い　あなたの甘美な流れに渇きを癒す。（新共同訳）

●あなたの家の味よきものに満ち足りる。あなたは　喜びの流れを彼らに飲ませる（フランシスコ会訳）

エデンが描かれています。　豊かさと楽しみが満ち溢れる世界を表現しています。　それは物質が満たされることではなく、

神と人との交わりを表現しているものです。

物質で私たちのたましいは満たされませんが、素敵な表現です。

実体よりも表現に酔ってしまいそうです。　このような文章の表現は、実体よりもことばに酔わせてしまいますね。

ナータ
נָטַע設ける

「　神である【主】は東の方のエデンに園をנָטַע（ナータ）設け、

そこにご自分が形造った人を置かれた。　」

ナータ
נָטַע植える、（天幕を）張る

ここでは神が形造ったものを植えるために、園を「設けた」のです。

ミッケデム　　エーデン
そのために神はあらかじめמִקֶּדֶם備えていたעֵדֶן エデンに

ガン
しかも四方で囲まれた庭である園גַּן を設けたのです。

そして神はその園に人が食べる木を生えさせました。（創 2：9）

これは黙示録 21 章「聖なる都　新しいエルサレム：エデンの園」に

相当します。　本体である「　新しいエルサレム（天の至聖所）　」

にはキリストによって新創造されて贖われた人々が置かれています。

神である主が大地のちり（粘土）で人を「土の器」として形造り、

そこに「いのちの息」を吹き込むことで「生きるもの」としました。

同様に、人は「エデンの園」に「置かれる」ことで、その務めを完成

させるのです。

生きものにされ、さらに人はエデンの園で与えられた務めを完成さ

せます。　その務めは、サタンが羨むほどの、妬みを起こすほどの務

めです。

スィーム
שִׂים置いた

「　据える　任命する　」

エデンの園に人を置かれた理由・・・　それは、

アーヴァド　シャーマル
エデンの園を耕すעָבַדためであり、守るためשָׁמַרです。（15節）　この二つの語彙は、「王なる祭司の務め」を示しています。そのために人はエデンの園に置かれ、据えられ、任命されたと言えます。　ただ単に美味しいものを味わうために置くのではなく、神様とともに住み、そこで神様の麗しさを感じて味わい、表現する者として人間に務めが与えられたのです。

スィーム
ですから「שִׂים置いた」は、2章8節で最も重要な語彙で、神がわざわざ「エデンの園」を設けて、人を置く必要を教えています。

スィーム　シート
「שִׂים置いた」（614回）と「שִׁית置いた」（86回）

スィーム
創２：８「שִׂים置く　据える　任命する　留める」

神が人をある使命のために永遠に置かれた。

創 3：15「שִׁית（シート）置いた」

蛇の子孫と女の子孫との間に神が深い意図で「敵意」を置かれた。

その敵意は永遠ではなく、創世記 3 章～黙示録 20 章までの

期間限定です。

創世記 3 章から「敵意」が入り「メシア王国」が終わるまで

「敵意」があり、メシア王国が終わると同時に「敵意」も終わり、

黙示録 21 章 22 章で、異次元の世界が待っています。

創世記 2 章 8 節「שִׂים（スィーム）置いた」は、期間限定ではなく永遠に人が

「王なる祭司」として働きを示していて、神が任命しているのです。

神が人を造られた時から、永遠に人は神の傍で権威を与えられて

神を知り、神の麗しさを表現する永遠の務めが置かれているのです。

この務めを 8 節「שִׂים（スィーム）置いた」に含ませているのです。

罪を犯しても「王なる祭司」の務めは失いません。

途切れることなく永遠に続きます。

今日のまとめ

「幕屋」での学びの中で、神と人が交わり「王なる祭司」として

神に仕える務めを学んできました。　この務めは永遠の務めです。

エデンの園から追い出されても、この使命を担う人がいるのです。

アベルがその最初の務めを果たしました。そして、

セト、エノシュ　・・と途切れることなく続いていきます。

私たちも「王なる祭司」として選ばれた者です。

そして、新しいエルサレムでは、「王なる祭司」は、イスラエルも

エックレーシアもなく、一律「神のしもべ」と呼ばれて神に仕えるよ

うになります。　そこで神のしもべたちは御顔を仰ぎ見るようにな

るのです。　私たちに「いのちの息」を吹き込んでくださる方の

御顔を仰ぎ見ることが出来るのは、神と人がともに住む家における

究極的な祝福であり、喜びなのです。

主が私たちを「神の栄光を現わすあわれみの器」として形造られたゆ

えに「私にとって生きることはキリスト」（ピリピ 1：21）となり、

「神が、すべてにおいてすべてとなられる」（Ｉコリント 15：28）こ

とが実体化されるのです。

人間が造られたのは、永遠に神の「王なる祭司」として仕えるためだと学びました。そのために、エデンの園に据えて置かれたのです。

サタンはこの出来事に腹を立てました。そして、

サタンの中に生まれた敵意が、

延々とメシア王国の最後まで繋がっていくのです。

創世記から発信して全体の流れで読めば、

なるほどと頷けるのではないでしょうか。

この世界にある敵意

より素晴らしい務めを人間に与えられたことで、

サタンは妬みを持ちました。

先に創造されたサタンは、面白くなかったのでしょう。

サタンがいつの時点で神に対して「敵意」を持ったのかは

書いてありませんが、人間が造られたのは、大きな要因かと推察します。　蛇はまだ出て来ませんが、神は妬む者を想定して警告していきます。　そして、神に敵対する勢力も起こされてきます。

神のシナリオは初めから計画されて歴史を進めておられます。

全知全能なる方は、歴史のコーディネーターであり、

シナリオライターです。

どのように進むのかを見据えておられるのですね。

2023．8．14　アシュレークラス月曜日

「創世記２章８節」

空知太栄光キリスト教会　銘形秀則